

## 株式会社ニチレイ

# 内部統制の IT 対応で浮上した 特権ユーザ管理の徹底 ニチレイグループが選んだのは、 デファクトスタンダードの CA Privileged Identity Manager

## 内部統制に直接関わる 33 台のサーバの特権ユーザアクセスを、 CA Privileged Identity Manager で完全コントロール



株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ  
情報企画本部副本部長  
総合企画グループリーダー

栗田 琢氏



株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ  
情報企画本部総合企画グループ  
マネージャ

桐生 正広氏



株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ  
システム基盤事業部  
食品・基盤管理グループ

折原 高志氏



とれたて作りたてのおいしさを生活者に届けることを目的に、使いやすく栄養価や味に優れた加工食品の製造や、産地と食卓を結び低温物流ネットワークを発達させてきたニチレイグループ。

コンプライアンス徹底とコーポレートガバ

ナンスの確立を企業理念の根幹に置く同グループでは、内部統制強化プロジェクトの一環で、情報システムへのアクセス対策問題が浮上。厳密な調査・検討の結果、選ばれたのは、OSに依存しない独立したアクセス管理を提供するCA Privileged Identity Managerだった。

## 企業理念の柱に、コンプライアンス徹底とコーポレートガバナンスの確立

ニチレイグループには、企業経営理念の根幹として「6つの責任」を掲げている。その中に明示されているのが「コンプライアンスの徹底」と「コーポレートガバナンスの確立」だ。

前者については、法務部門の強化などの施策や社員教育の実行に加えて、まずは社員一人ひとりが、「今日一日の仕事を、胸を張って家族に話せる」ことを基本に、自信と責任感を持って業務に取り組むことを誓っている。

また、後者の視点からは、仕事・経営の基本としてのPDCA（Plan、Do、Check、Action）サイクルの実践を、全社的に徹底していくことを根本に、内部統制を強化すべく、セルフチェックと外部評価の両面から仕組みづくりを進めている。セルフチェックに関しては、経営監査グループによるグループ監査に加えて、持株会社内に事業経営支援グループを設置して、「身近な外部評価」としての機能を強化している。

中でも注力したのが内部統制監査システムの確立である。2007年4月より、グループを挙げたプロジェクトとしてスタート。そこには同グループの戦略的ITソリューションプロバイダーである株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ（以下、日立F&L）も参加、内部統制監査システムをITの側面からサポートする手法を探ることになった。

議論および方針の決定は順調に進み、2007年10月にはIT統制の実現をどうするかという各論部分に到達した。ここでは慎重な検討が求められた。内部統制には、統制環境の整備やリスク管理、統制活動の実践、モニタリングなどいくつかの項目があり、ほとんどはこの活動の発祥国である米国などに豊富な実例を見ることが出来る。しかし、ITでの対応は日本で独自に追加された項目である。そのため企業は個々に知恵を絞る必要がある。

IT統制の実現において、同グループの監査法人から主としてアドバイスされたのは、情報システム基盤全般における特権ユーザ管理だった。特権ユーザというのは、制限なしでアプリケーションシステムやサーバOSに関してすべての権限を持つユーザのこ

とを指す。これはシステム管理者による利用と管理の利便性を考えて設定されたものであるが、誤った使い方をすれば致命的なセキュリティホールになる危険性を有している。

日立F&Lが一手に担っているニチレイグループのシステム運用で、これまで特権ユーザ管理を原因としたトラブルが発生したことはない。しかし、同グループにおけるコンプライアンスやコーポレートガバナンスに対する断固たる取り組みを考えれば、日立F&Lにおいてもさらに高いレベルのシステム運用水準の提供や運用内容の積極的な開示を実現したいという思いがあった。

そこで、企業の内部統制を直接的に掌管する金融商品取引法の施行を前に、本格的に特権ユーザ管理に乗り出すことを決断した。

## 命題はOSレベルの特権ユーザ管理 市場の評価で選んだCA Privileged Identity Manager

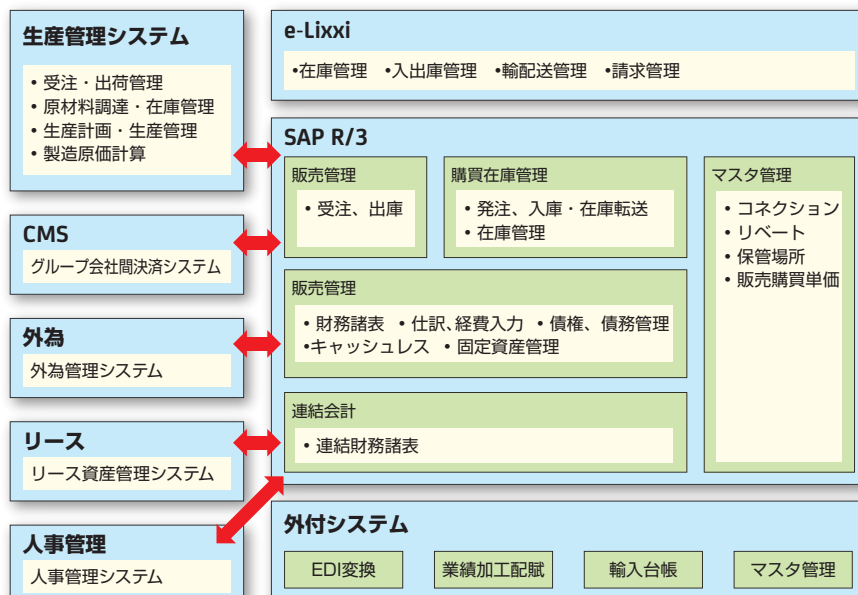
ニチレイグループの事業の中で主力となっているのは加工食品事業と低温物流事業である。情報システムも、大きくはこれらのビジネスを支援する形で構築されている。

今回のプロジェクトでは、金融商品取引法に直接関係するアプリケーションシステムであるERPパッケージ（SAP/R3）上の会計管理システムを含め、大きく8つのシステム、33台のサーバが対象となった（図1）。一部のアプリケーションについては、パッケージベンダーの提供するアクセス管理ソフトウェアを導入することで、アプリケーション上のアクセス管理が可能となるものもあったが、OSレベルでのアクセス管理を行わなければ、抜本的な対策を講じたとはいえない。

日立F&Lがサーバの特権ユーザ管理において挙げた要件は大きく2つある。1つはrootユーザ権限でのアクセスを制限できること。もう1つは管理作業の詳細なログが取得できること。これら2点を実現できるソリューションを検討し、選択したのがCA Privileged Identity Managerだった。

CA Privileged Identity Managerは、サーバOSの種類に依存しない独立したアクセス管理ソリューションだ。OSが提供する特

図1：ニチレイ様におけるCA Privileged Identity Manager 導入対象システム



権ユーザで行えるシステムリソースへのあらゆるアクセス権の管理を含め、監視および管理を行うことができる。また、アクセス権の詳細な設定が可能で、管理者を含めた任意のユーザの管理や権限委譲をコントロールすることが可能である。

二チレイグループの内部統制監査プロジェクト、そのメンバーの一人として、システム選定を進めた株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ情報企画本部総合企画グループマネージャ 桐生正広氏は、採用の理由を次のように語る。

「CA Privileged Identity Managerは、内部統制関連のセミナーに出席したら必ず出てくる製品でした。また、世界的にも日本においても導入実績が豊富にあり、これだけの企業で使われているならと安心することができました」

「デファクトスタンダードはどれかという視点で選んだ」と、株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ情報企画本部副部長総合企画グループリーダ栗田琢氏は桐生氏を補足してこう語る。

「システム選定は、少し冒険をしてもよいものと、あくまでも堅牢にすべきものの二通りあります。今回は後者で選びました。なにより二チレイグループ全体の情報システムに適用するセキュリティ対策の製品であり、また、すでに本番で稼働している止められないサーバに導入するものなので、下手なものを選ぶわけにはいきませんでした。さらに、デファクトスタンダードの製品であれば、二チレイグループに対しても理解を得やすいという期待もありました」

栗田氏の期待は現実になった。二チレイグループにおけるCA Privileged Identity Manager導入は、極めてスムーズに決定したのである。

## システム運用の実情を踏まえながら、無理のない特権ユーザ管理が可能

インストール作業がスタートしたのは、2008年4月のことだ。す

べては日立F&L主導のもとで進められた。これはITソリューションプロバイダーとしての同社の基本的なスタイルである。決してベンダーやシステムインテグレータに依存することなく、常に自ら汗をかき知恵を絞ることを選択する。そうするのは、スキルを自社に蓄積してこそ、真のソリューションが提案でき、いざというときの事業環境変化にも機敏に対応可能だと考えるからである。

そのような方針のもと、株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズシステム基盤事業部食品・基盤管理グループ折原高志氏が、CA Privileged Identity Managerを導入してのシステム運用をスタートさせた。

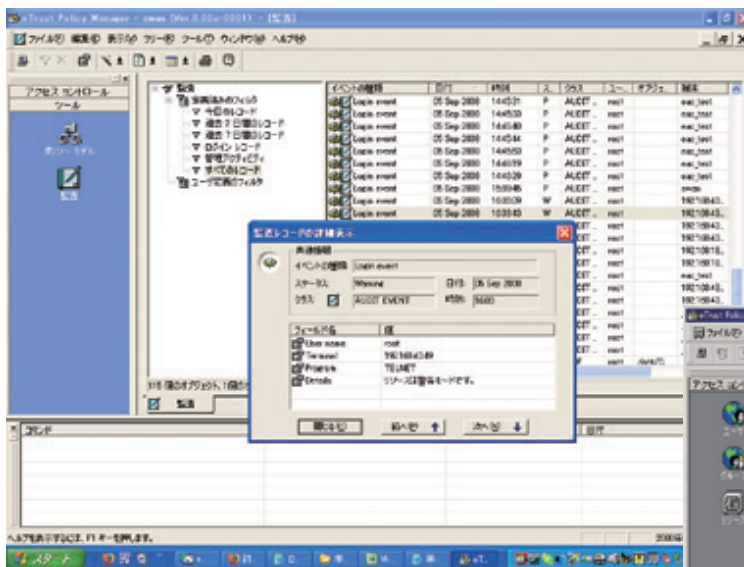
対象サーバの運用状況を見極めながら、インストールを行い、まずはシステムチューニングによって、rootユーザ制限による影響範囲を調べて修正するとともに、rootユーザでの作業を原則行わないという運用ルールを日立F&Lスタッフに徹底させていく。

折原氏はCA Privileged Identity Managerを操作する中で、その使用実感を次のように語る。

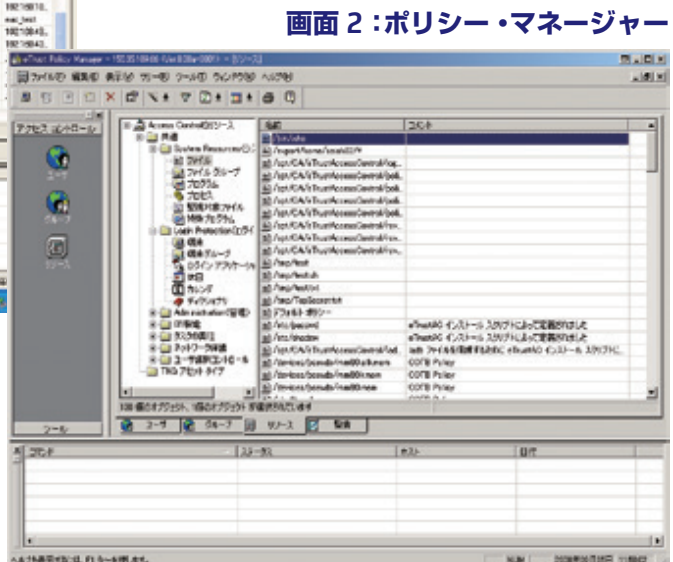
「ワーニングモードという機能はいいですね。これを利用すると、CA Privileged Identity Managerの制限がシステム・アプリケーションの実行に悪影響を及ぼす疑いがある場合、実際には制限をかけずにアクセス警告メッセージをログに出すということを行ってくれます。セキュリティ・ポリシーが適正なレベルであるかどうかを判断した上で適用できるので、トラブルなくセキュリティ水準を上げていくことができます（画面1）」

折原氏はまた、エクスプローラ形式の管理インタフェースであるポリシー・マネージャーについても言及した。

「サーバのセキュリティポリシーモデルというのは、ときどき確認の必要が生じるんですが、直接アクセスしていちいちコマンドを発行しなければならないとなると面倒です。しかし、ポリシー・マネージャーを利用すれば、サーバにログインすることなく、各種サーバのポリシーモデル・ソースに一元的に接続でき、わかりやすいGUI画面で設定を確認できるのがいいですね（画面2）」



画面 1 : ワーニングモード



画面 2 : ポリシー・マネージャー

## 今後はさらに

### CA Privileged Identity Managerの適用範囲を拡大

2008年9月現在、13台のサーバにCA Privileged Identity Managerによる特権ユーザ管理が講じられた。残り20台に関しても、2008年12月をめどに作業が完了される予定である。

このように導入は現在進行形であるが、その効果はすでに現れている。栗田氏は次のように語る。

「従来のシステム運用では、どうしても個人依存の作業を排除できず、そこがブラックボックスになる傾向がありました。ですが、CA Privileged Identity Managerの導入によりrootユーザでのサーバアクセスは原則行わないというシステム運用ルールを確立し、また現実に制限を行うことで作業の透明性が向上しました。また、ログ取得により、万が一何かあったときも作業内容を詳細まで追求することができます。なによりCA Privileged Identity

Managerを導入したことで、システム運用プロセスを根本的に見直し、透明性の高い形で標準化していこうという気運が生まれました。それこそが最大の効果だと考えています」

今回の“特権ユーザ管理プロジェクト”は、対象とされた33台のサーバへのCA Privileged Identity Manager導入が完了した段階でひと段落する。しかしながら、ニチレイグループで稼働している情報システムのサーバは、実は総数にして200台以上あり、金融商品取引法には直接関わらないまでも特権ユーザ管理を行った方がいいサーバが少なからず存在するという。今後は、セキュリティ水準のさらなる向上を目標として、そうしたサーバに対しての適用を検討していくとのことだ。さらに、同グループで制定した情報セキュリティポリシーをベースにしたグループレベルでのセキュリティインフラ構築も積極的に進めていく予定である。

## 企業プロフィール

### 株式会社ニチレイ

創業は終戦間もない1945年（昭和20年）12月。以来、とれたて作りたてのおいしさを生活者に届けることを目的に、世界中から良質の水産品や畜産品を調達するとともに、使いやすく栄養価や味に優れた加工食品の製造、鮮度を維持したまま産地と食卓を結ぶ低温物流ネットワークの構築に貢献してきた。日本で初めて冷凍食品の製造・販売を行ったのも同社で、今やこれは家庭の食卓やお弁当、レストランや給食など食生活のあらゆる場面で欠かせない食品ジャンルになっている。食の安全確保への真摯に取り組んでおり、生活者に安心を届けるため、独自の品質管理のルールや仕組みを作り上げるとともに、原材料の産地情報を積極的に公開している。今回のCA Privileged Identity Managerを利用した内部統制強化プロジェクトの推進も、そうした同グループの基本的な企業姿勢を反映したものと見えそうだ。

### 株式会社日立フーズ&ロジスティクスシステムズ

食品・低温流通業界トップのノウハウと技術を持つ、ニチレイグループの戦略的ITソリューションプロバイダー。日立製作所、ニチレイ、日本ユニシスの3社合併により2003年に設立された。顧客視点で将来構想を考え、現場の生の声をシステムに生かす姿勢で、時代を先取りしたソリューションを届けている。



※製品の詳細情報については、弊社Webページ ([www.ca.com/jp](http://www.ca.com/jp)) をご覧いただくか、CA ジャパン・ダイレクト (0120-702-600) までお問い合わせください。

## CA Technologies

お問い合わせ

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-9 JA 共済ビル  
お問い合わせ窓口：CA ジャパン・ダイレクト 0120-702-600  
WEB サイト：www.ca.com/jp

すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。  
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。  
©2014 CA, and / or one of its subsidiaries. All Rights Reserved.